

よく知られているように、寺田寅彦と夏目漱石は熊本の旧制第五高等学校で生徒と先生として初めて出会っている。漱石が愛媛県尋常中学校を辞して五高に赴任したのが明治29年4月、寅彦の入学が同年9月である。最初は教室で英語の授業を受けるだけだったのであろうが、個人的な付き合いが始まるのは31年の7月初め頃に、井川淵町へ漱石を訪ねた時である。

昭和7年に書かれた『夏目漱石先生の追憶』によると、第二学年の試験が終わったころ、同県学生のうちで試験を「しくじったらしい」二三人のために、いわゆる「点をもらう」ための運動委員に選ばれて漱石を訪ねたのである。目的の話が済んだ後、俳句について問いかけている。少し長くなるが引用してみる。

とにかくこの重大な委員の使命を果たしたあとでの雑談の末に、自分は「俳句とはいったいどんなものですか」という世にも愚劣なる質問を持ち出した。それは、かねてから先生が俳人として有名なことを承知していたのと、その頃自分で俳句に対する興味がだいぶ発酵しかけていたからである。その時に先生の答えたこと的要領が今でもはっきりと印象に残っている。「俳句はレトリックの煎じ詰めたものである。」「扇のかなめのような集注点を指摘し描写して、それから放散する聯想の世界を暗示するものである。」「花が散って雪のようだと云ったような常套な描写を月並みという。」「秋風や白木の弓につる張らんと云ったような句は佳い句である。」「いくらやっても俳句のできない性質の人があるし、始めからうまい人もある。」こんな話を聞かされて、急に自分も俳句がやってみたくなった。そうして、その夏休みに国へ帰ってから手当たり次第の材料をつかまえて二、三十句ばかりを作った。夏休みが終わって九月に熊本へ着くなり何より先にそれを持って先生を訪問して見てもらった。その次に行った時に返してもらった句稿には、短評や類句を書き入れたり、添削したりして、その中の二三の句の頭に○や○○が附いていた。それからが病み付きでずいぶん熱心に句作をし、一週に二、三度も先生の家へ通ったものである。

漱石は大学時代の友人、正岡子規の影響で俳句を作り始めた。前の任地松山はその故郷である。子規が帰郷し同宿していた時期があったりして地元の人たちも混じって句作に耽っていた。松山から、また熊本から東京の子規に句稿を送り、子規は批評・添削して送り返している。

つまり子規が漱石を指導したのと同じ方法で漱石は寅彦を指導したのである。漱石と寅彦の句作数と熊本時代を表にすると次ページのようになる。

この表でわかるように二人とも熊本時代が句作の中心である。その後をみると、漱石は

イギリス留学と帰国後は表現方法が小説に移ることにより激減している。寅彦は大学に進学して学業が忙しくなったのと、漱石の興味の移行に影響されて小説や随筆に変わっていった。また二人ともこの熊本時代に結婚している。

漱石と寅彦 年ごとの句作数とできごと

年（明治）	漱石	寅彦	人事
27 以前	52	0	
28	464	0	（漱石） 4 月 愛媛県尋常 中学校に赴任
29	522	0	（漱石） 4 月 第五高等学校に赴任、6 月中根鏡子と結婚 （寅彦） 9 月 第五高等学校に入学
30	288	1	（寅彦） 7 月 高知にて阪井夏子と結婚
31	103	93	（寅彦） 7 月初め頃夏目漱石を初めて訪問
31～32		452	
32	350	370	（漱石） 5 月 長女筆子誕生 （寅彦） 7 月 第五高等学校卒業、9 月 東京帝国大学入学
33	19	159	（漱石） 7 月 英国留学のため熊本を離れる
34	20	110	
35 以降	709	212	（漱石） 明治 36 年 1 月 24 日 帰朝（新橋着）
合計	2,527	1,397	

前置きが長くなったが、この時代を中心として二人の俳句（一部は短歌など）を対にして句合せを試み、互いの感応の様子を探り、味わってみたい。[] 内は前書き、句作の年、季語・季節。

（漱石） 凧（こがらし）や海に夕日を吹き落す [明治 29 凧・冬]

（寅彦） 弦月の下吹き通す野分かな [明治 31 野分・秋]

松山も熊本も西に海があるが市街地からは見えないようである。この年の 11 月 14 日から 19 日まで、漱石は生徒を引率して天草・島原地方へ修学旅行に行っている。この時の印象を句にしたのではないかと、とも言われている。両句とも緊張の中で礼を正すようであり雄大な景色が目浮かぶ。

（漱） 行く秋やふらりと長き草鞋（わらじ）の緒 [明治 29 行く秋・秋]

（寅） 日は斜枯野を北へ走る汽車 [明治 31-2 枯野・冬]

敷設間もない鹿児島本線の門司行き列車だろうか。それでも交通機関の発達はまだまだであり歩き主体の移動である。人も今では考えられない健脚が普通であった。ゆったりと

した旅への思いが募る。

(漱) 日あたりや熟柿の如き心地あり [明治 29 熟柿・秋]

(寅) 栗を焼くある夜の雨のつれづれに [明治 31-2 栗・秋]

とてもいい心持ちを熟柿の如き心地と言い表している。一方寅彦は結婚していながらの一人住まいで、しみじみとした寂しい気持ちが感じられる。

(漱) 半鐘と並んで高き冬木哉 [明治 29 冬木・冬]

(寅) 寒月や撃柝(げきたく)ひびく監獄署 [明治 31-2 寒月・冬]

今ではあまり見かけなくなったが当時は半鐘がたくさんあったのだろう。木製で大きな梯子を垂直に立てた様な、高さは10メートルくらいだろうか、一番上に鐘が吊られており火事の時に人が登って叩いて知らせるものである。筆者が子供の時、近所にあったが下の数段までしか登れなかったことを覚えている。撃柝は拍子木を打ちならすこと。高知の寅彦旧邸の川向うに監獄署があった。

(漱) 枕辺や星別れんとする晨(あした) [内君の病を看護して 明治 29 星の別れ・秋]

(寅) 取かゆる氷袋や明け易き [妻の病に持して 明治 32 明け易き・夏]

二人とも妻帯していたのでその病気を看護することもあったであろう。内君とは一般的には他人の妻の尊敬語であるが、ここでは自分の妻・鏡子夫人を指している。「星の別れ」は牽牛星と織女星が七夕だけに会うという伝説にちなむ季語。寅彦は卒業して高知に帰った時の情景か。ともに夜が明けるまで見守っていたのであろう。

(漱) どっしりと尻を据えたる南瓜かな [明治 29 南瓜・秋]

(寅) 垣にぶら下って居た南瓜が大きくなったと見て居ると風が吹ひて来てするするすると垂れ落ちて水引の花の中へ腰をすへた。成程 Newton ハエライと考えると垣の外の車井戸の屋根でアホーと鳥が鳴いた。 [日記 明治 32 年 9 月 11 日]

絵手紙にでも描かれそうな南瓜である。漱石は『吾輩は猫である』をホトトギスに連載して単行本にまとめるとき、中編に明治 39 年 10 月付けの自序を記している。ロンドン留学中に病中の子規を慰めるために手紙の遣り取りをしたが十分に依頼に応えることができなかったと述べ、上記の句と「長けれど何の糸瓜とさがりけり」を正岡子規の霊前に献上すると書いている。

寅彦は後の物理学者だけあり、動きの観察が鋭くユーモアもある。

(漱) ぶつぶつと大いなる田螺(たにし)の不平哉 [明治30 田螺・春]

(寅) 鮫鱈(あんこう)の大口あいて笑ふ哉 [明治31-2 鮫鱈・冬]

田植えの終わった後、田螺が泡を出しているのを見ているのだろうか。正岡子規宛手紙に書かれている「教師をやめて単に文学的の生活を送りたきなり換言すれば文学三昧にて消光したきなり」との思いがこの句になったのかもしれない。鮫鱈は名前も姿もユーモラスであるが、「笑う」が効いている。

(漱) ふるひ寄せて白魚崩れん許りなり [明治30 白魚・春]

(寅) 夕映や沙魚釣(はぜつり)もどる土堤の上 [明治31-2年 沙魚・秋]

四つ手網での大漁風景、あるいは蕙をふるって天日乾燥させた小魚を集めているのかもしれない。夕陽を受けて釣り棹をかざして土手を歩いているのも絵のようである。

(漱) 菫程な小さき人に生れたし [明治30 菫・春]

(寅) バイブルに菫菜(すみれ)一輪挿みたる [明治31-2 菫・春]

漱石の句は意味がとりにくい、田螺の句と同じ思いが込められているのかもしれない。寅彦はキリスト教への興味も持っていた。花を葉にするのは若い時のロマンを感じる。いずれも小さな紫の花を句にしており芭蕉の「山路来て何やらゆかし菫草」を連想させる。

(漱) 灰に濡れて立つや薄と萩の中 [阿蘇の山中にて道を失ひ終日あらぬ方にさまよふ 明治32 薄、萩・秋]

(寅) 山あれて灰の降りたる枯野哉 [阿蘇山下にて 明治31-2 枯野・冬]

漱石は8月29日から9月2日まで、東京へ転任することが決まった同僚の山川信次郎と阿蘇へ旅行している。この体験から小説「二百十日」が生まれている。これは圭さんと碌さんの二人が阿蘇の噴火口を見に行こうと連れ立って出かけ、二百十日の暴風雨にあって腰を没する程に延びたススキの原で道に迷い、灰と雨で濡れ鼠になって引き返すという話であり、実体験のようである。句の前書きを膨らませて小説にしている。寅彦は修学旅行で訪れたのかもしれない。

(漱) 鳥も飛ばず二百十日の鳴子かな [阿蘇神社 明治32 鳴子・秋]

(寅) 鳴子引日に五匁の麻をうむ [明治31 鳴子・秋]

ともに鳴子が詠まれている。これも今ではあまり見かけないが50センチ程の木板に太さ3~5センチ位の竹管を紐で掛け連ねたものを柱や樹木に吊るして縄を張り、遠くで引けば音が出て雀などが驚いて逃げる仕掛けである。

寅彦の句は意味がとりにくい。麻は皮から繊維を取るために栽培するが実も鳥の飼料な

どに利用され、古くから全国的に栽培されていた。野鳥を追い払うことで収量が増えるということだろうか。

(漱) 秋の川真白な石を拾ひけり [内牧温泉 明治 32 秋の川・秋]

(寅) 売れ残るラムネに秋の夕日哉 [明治 31 秋の日・秋]

この漱石の句も阿蘇旅行で生まれたもの。寅彦の句は漱石評で「斬新」と書かれている。共に色彩対比が鮮やかである。

(漱) 白露や研ぎすましたる鎌の色 [内牧温泉 明治 32 白露・秋]

(寅) とぎすます敏鎌(とがま)の上や二日月 [明治 31-32 二日月・秋]

ともに刃先の光っている鎌がテーマになっている。農業用道具であるが、目にする機会が多かったのだろうか。『花物語 野薔薇』の若者と行き交う場面を思い出す。

(漱) べんべらを一枚着たる寒さかな [明治 32 寒さ・冬]

(寅) 這い込めば蒲団つめたしかたくして [明治 31-2 蒲団・冬]

べんべらの発音で句が生きている。べんべら物とは、ぺらぺらしたもの、安物、着古した絹の衣服のことである。両句とも冬の寂しい生活感があふれている。特に寅彦は高知に妻・夏子を残しており、結婚していながら一人住まいの切なさが感じられる。

(漱) 寄り添へば冷たき瀬戸の火鉢かな [明治 32 火鉢・冬]

(寅) 火燧(こたつ)してアルバムを見る女哉 [明治 31-2 火燧・冬]

当時の暖房器具は火鉢や炬燵しかなかった。火が埋けてあっても火鉢の表面はあまり暖かくないが、寄り添っても冷たい、とは人間関係のことだろうか。寅彦の方は暖かい団らんそのものようである。炬燵に入っているのは妻・夏子であろう。

(漱) いかめしき門を這入れば蕎麦の花 [秋季雑詠・学校 明治 32 蕎麦の花・秋]

(寅) 敷石に紅葉散りけり門の内 [明治 31-2 紅葉・秋]

この門は赤レンガ造りの五高の正門であろう。当時は門を這入って本館までの道路の両側に畑が広がっていた。五高後身の熊本大学黒髪キャンパスは樹木が多く、正門(通称赤門)の近くには桜などが茂っている。表門から本館までの敷石を歩む寅彦を思い浮かべると楽しいが下宿は反対側に位置していたので通学にはこの門を通らなかったような気がする。

(漱) 南窓に写真を焼くや赤蜻蛉 [物理室 明治 32 赤蜻蛉・秋]



熊本大学の赤門（筆者撮影）

其南の窓の圃（しきい）によく写真の焼枠が出してあった。窓圃は白い石で出来て居たやうに思ふ。それに秋の日がかんかん照って居た光景は、今でも頭にはっきり印象されている」とある。確かに五高記念館図録収載の模型配置図を見ると物理実験場は南側に窓が多い建物である。当時の写真はコロディオオン湿板法であり、でき上がったガラス板の写真はポジとして見ることができたがネガとしても使われた。卵の白身に食塩を混ぜて紙に塗り、乾かした後に硝酸銀溶液を塗って感光性を持たせた印画紙（鶏卵紙）にネガを密着させて強い太陽光に当てて焼き付けると赤褐色の画像が現れたという。

（漱） 安々と海鼠（なまこ）の如き子を生めり [明治 32 海鼠・冬]

（寅） 何もなき庭の垣根に朝顔の枯れたるままの坪井の邸 [大正 6 渋柿漱石追悼号]

内坪井の家で長女の筆子が生まれた時の句であり、現在記念館になって句碑が建っている。寅彦の短歌は松根東洋城主宰の俳句雑誌渋柿の漱石追悼号に載ったもの。海鼠は人間に似ているのだろうか。関連して下旬がある。

（漱） 朝顔や手拭懸に這ひ上る [明治 31 朝顔・秋]

（寅） 人間の海鼠となりて冬籠る [明治 33 冬籠・冬]



内坪井 夏目漱石旧居記念館（筆者撮影）

いる。また授業について次の歌がある。

（漱） ニッケルの時計とまりぬ寒き夜半
[明治 32 寒し・冬]

（寅） 講壇の隅にのせおくニッケルの袂
（たもと）時計を貴しと見き [同追悼号]

ニッケルメッキの銀色時計は教授の誇りの象徴のようにも思われる。ネジを巻き忘れて止まったのだろうか。寅彦もこの時計が記憶に残ったとみえて追悼歌に詠んで

(寅) 春寒き午前七時の課外講義オセロを読みしその頃の君 [同追悼号]

初めて俳句の話をしてから一年余り、熊本での別れの時が来る。寅彦が卒業して東京へ去ることになったのである。寅彦は高知から桂浜の五色石を送っている。

(漱) 涼しさや石握り見る掌(たなごころ) [寅彦桂浜の石数十顆(つぶ)を送る 明治 32 涼し・夏]

(漱) 時くれば燕もやがて帰るなり [送別 明治 32 燕帰る・秋]

(寅) 行秋や芒(すすき)瘦せたる影法師 [漱石師に送る写真の裏へ 明治 32 行秋・秋]

すでに認め合う間柄になっていた二人の送別の句である。寅彦の句は前書きが無いと分かりにくいように思う。

漱石はイギリス留学が決まり、寅彦の後を追うように明治 33 年 7 月に熊本を離れ、9 月 8 日横浜港からドイツ汽船プロイセン号で出発している。漱石から寅彦へのハガキが残っている。「小生出発は汽船出発の時刻変更の為め午前五時四十五分の汽車と相成るべくと存候是も正確ならず御見送御無用に」の後に次の句が記されている。

(漱) 秋風の一人をふくや海の上

師思いの寅彦は横浜埠頭まで見送っている。『夏目漱石先生の追憶』によれば、ハガキは神戸からよこされたとある。この句は短冊にも書いて鏡子夫人のために留守宅に残していた。『漱石俳句研究』で寅彦は「淋しさを思ひ切る為に作ったのかもしれない」と発言している。漱石にとって旅の心細さ、孤独な気持ちを分ってもらえるのは鏡子夫人より寅彦であるとの思いがあったように思う。

このようにして二人の熊本五高時代、俳句熱中時代は過ぎ去った。

(寅) 俳句とはかかるものぞと説かれしより天地開けて我が眼に新 [大正 6 渋柿漱石忌記念号]

参考文献

1. 漱石全集第 17 卷(1996 年 1 月)、漱石全集第 12 卷(1967 年 3 月) 岩波書店
2. 寺田寅彦全集 第 1 卷、第 11 卷(1996 年 12 月、1997 年 10 月) 岩波書店
3. 漱石俳句研究(1925 年 7 月) 岩波書店
4. 荒正人 漱石研究年表(1974 年 10 月)、増補改訂漱石研究年表(1984 年 6 月) 集英社
5. 熊本市内坪井夏目漱石旧居記念館編 漱石 熊本 in 五十句